

## まちや 町屋遺跡

所在地 一宮市千秋町町屋  
(北緯35度17分30秒 東経136度51分44秒)

調査理由 県道名古屋江南線道路拡幅工事

調査期間 平成19年11月～平成20年2月

調査面積 1,600㎡

担当者 石黒立人・蔭山誠一・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「一宮」)

**調査の経過** 発掘調査は、県道名古屋江南線拡幅工事の事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。県道名古屋江南線が名神高速道路と交差する地点を中心に南北約500mの範囲を調査対象地とした。

**立地と環境** 町屋遺跡は一宮市南東部に位置する。青木川左岸の自然堤防上に立地するが、当該地域は犬山扇状地の末端でもあり現地表下約2mで基盤礫層がみられる。標高は約11mである。

遺跡として知られるようになったのは古く、戦前(昭和16年)には、弥生土器や石鏃・石斧などの石器が採集されて報告されている。その後昭和31年には「花ノ木遺跡」として発掘調査が実施され、弥生時代中期の遺物が多く出土した。遺跡周辺はこれまで水田や畑が部分的に残されていたが店舗や工場などの開発が進んでいる。

**調査の概要** 遺跡およびその周辺では、水田や畑だったところに最近の土盛り整地が多くみられる。土盛り整地下の状況は、異同はあるものの旧水田(畑)耕作土が確認され、概ねその下で基盤層である黄褐色粘質シルト層がある。この上面を遺構検出面とした。畑の場合は耕作土下に遺物包含層が確認されることがあり、その上層では山茶碗や近世陶磁器を若干含み、下層では弥生土器と石器のみがみられる。07C・07I区では比較的遺物包含層が厚く、上・下層合わせて約60cmの地点もあった。それに対して名神高速道路南側の調査地点では概して遺構の残存状況は悪い。遺物も少ないことから遺跡縁辺の可能性が高いが、基盤層を掘り込む攪乱が多いので注意が必要である。

検出された遺構は、弥生時代中期の竪穴住居跡約20棟と弥生時代後期と考えられる方形周溝墓5基、弥生時代以降の溝10条、古墳時代の河道1条、7世紀後半の土坑3基がある。また弥生時代の土坑や柱穴も多数確認した。出土遺物の主体は弥生土器と同時代の石器であり、ほかに若干の須恵器・山茶碗・近世陶磁器がある。

**弥生時代中期の集落** 名神高速道路北側の07C・07D・07I区では、竪穴住居跡や土坑などが多数確認され出土遺物も多かった。時期は弥生時代中期前葉から中期後葉である。この北側の07B・07H区では住居遺構や遺物がほとんどなかったが、さらに北の07A・07G区において弥生時代中期後葉の竪穴住居跡や土坑などが検出された。07A・07G区の北端では、基盤層が北へ下る傾斜があり遺構や遺物が希薄になることが確認された。このことから弥生時代中期の居住域は、微高地上全面に展開するのではなく複数の小居住域によって構成されていたものと考えられる。

竪穴住居跡からは中期後葉の土器が出土するが、隣接あるいは重複して検出された土坑からは中期前葉の土器が出土する。土坑のなかには長軸約4mの袋状になるものもあり、その覆土中からは石器剥片が多数出土した。

名神高速道路南側の07J区では、弥生時代中期前葉の竪穴住居1棟と弥生時代中期の土

坑1基を確認した。これにより名神高速道路南側にも弥生時代中期の集落が広がっていた可能性が高くなり、狭小な調査区ながら一定の成果があげられたものとして意義深い。

弥生時代後期の墓域

弥生時代後期には居住域が移動したのか、明確な住居遺構はみられなかった。その一方で07C・07I区にかけて幅約5mの周溝を廻らした方形周溝墓を確認した。方形周溝墓の規模は一辺約20mと大型である。周溝の南西隅ちかくでは赤彩のある土器片やガラス小玉が出土した。周溝の覆土上層では廻間式土器もみられるので、墓に対して継続的な祭祀があった可能性がある。

このほかにも、弥生時代中期の住居遺構が希薄な07B・07H区と07I区北部では、L字に屈曲する溝や、東北東から西南西にはしる幅約2mの溝が約10条確認できた。詳細時期は特定できていないが出土遺物は弥生時代の土器にほぼ限定される。このことから前者は方形周溝墓の周溝、後者は弥生時代にさかのぼる区画溝の可能性が考えられ、微高地上に墓域が展開していたと想像される。

注目される遺物

今回の調査において注目される遺物として、07C区の水田耕作土中より出土した有樋式銅剣形磨製石剣、同区123SK出土の鳥形土器、07H区北端の細粒砂層のラミナ堆積中(自然流路か)から出土した双口土器と片口高杯がある。有樋式銅剣形磨製石剣は基部近くの小片が出土した。粘板岩製で搬入品であろう。双口土器は片口高杯と近似した胎土で、壺の体部上半に波状文が施されている。両者はセットになっていたとみられ、中期中葉の特殊土器と位置づけられる。

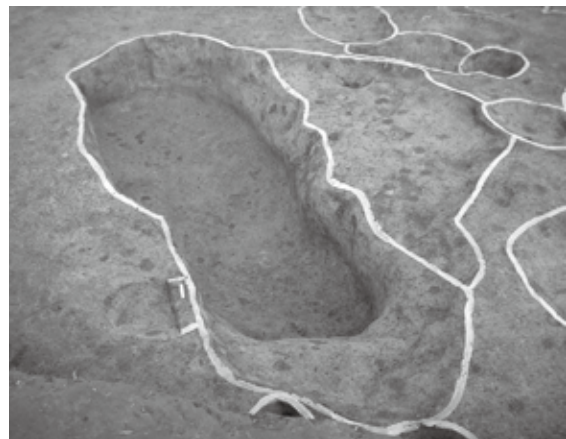
まとめ

町屋遺跡は長らく、弥生時代中期から後期の遺物包蔵地として知られるにとどまっていたが、今回の調査により弥生時代中期の集落および後期の墓域からなる遺跡であることが明らかとなった。当該遺跡の周辺には猫島遺跡や平松遺跡などの弥生時代遺跡が所在しており、それらとの比較検討が今後の課題である。千秋町一帯の弥生時代から古墳時代の動向を探る上で貴重な調査成果が得られたものといえよう。

(蔭山誠一・永井邦仁)



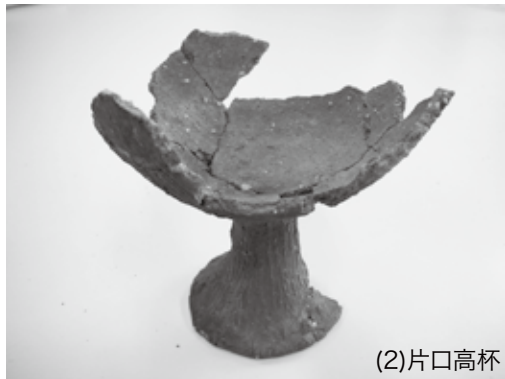
07Cc・ld区全景



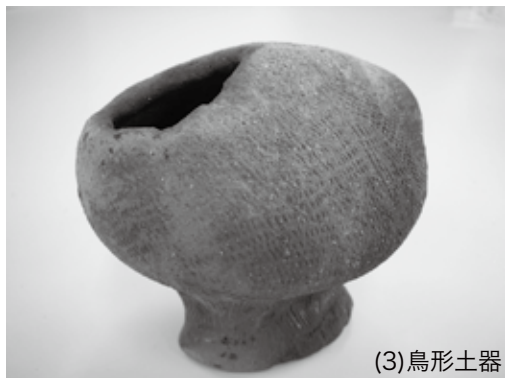
07Cc区051SK



(1)双口土器



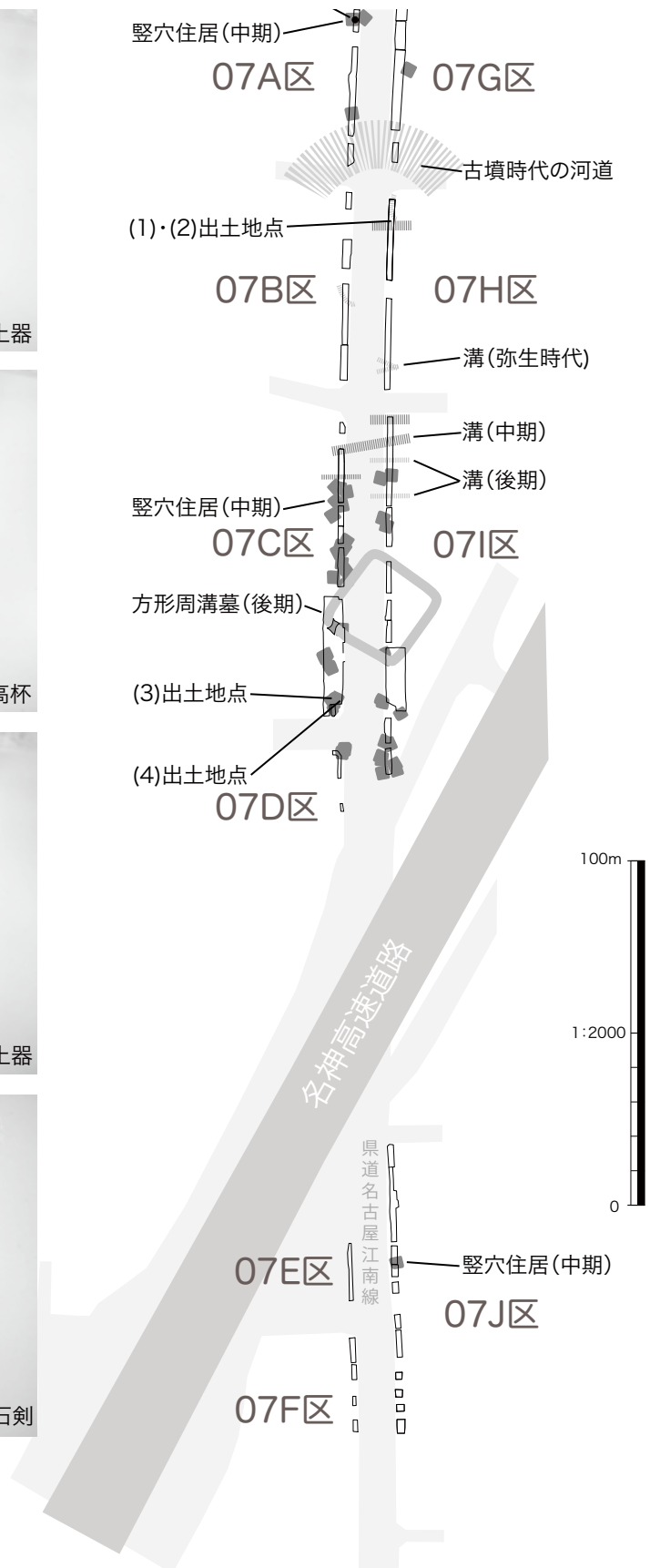
(2)片口高杯



(3)鳥形土器



(4)磨製石剣



町屋遺跡の弥生・古墳時代の主要遺構配置図 (1/2,000)